

荒このみ著

『アフリカン・アメリカンの文学』

(平凡社)

アメリカの黒人は歴史的にアフリカン、アングロ・アフリカン、ブラック、ニグロ、カラード、アフロ・アメリカンなどとさまざまに呼ばれ続けてきて、今はアフリカン・アメリカンと呼ばれている。これはここ二十年くらいのことらしい。アフリカン・アメリカンを著者は「アメリカの黒人」とかつきで呼ぶ。「アメリカ市民ではあるが、普通のアメリカ人でもなくアフリカ人でもない」からである。

本書は「アメリカの黒人」の夢(アフリカン・アメリカン・ドリーム)とアイデンティティーの追求を彼らの文学作品を通して分析しようとしたものである。二十世紀アメリカの黒人文学論が簡潔でしかも説得力のある文体で展開されており、この分野に素人の評者にも確かなイメージをもたらしてくれた。

本書は全三章及び三つの「間奏曲」から成る。第一章「アメリカの黒人」の系譜学」では、「奴隸船」という歴史的事実と「アメリカの黒人」の生まれてくる領域を結びつけ、「奴隸船」を象徴的なトポス(領域)としてとらえる。アミリ・バラカ、チャールズ・ジョンソン、ジェイムズ・

ポールドウイン、イシユマイル・リードたちの文学作品を扱いながら「アメリカの黒人」の意味を問いつつ、その系譜をたどる。そして著者はチャールズ・ジョンソンの作品評価を通して黒人作家のアメリカにおける成熟と見なす。

第二章「アフリカン・アメリカン・ドリーム」ではハーレム・ルネサンスと呼ばれる一九二〇年代の作家たち、「アフリカへ戻ろう」と訴えたガーヴェイ主義、アフリカ大陸を体験したマヤ・アンジェロウなどその後の作家たちを取り上げる。「黒人には過去の歴史を無意識のうちに取り込もうとする衝動があるのかもしれない」と著者はいう。著者はまた次のようにも語っている。「アフリカへ戻ろうというのは『アメリカの黒人』の抱く『アメリカン・ドリーム』である。いわば『アフリカン・アメリカン・ドリーム』である。そして『アフリカン・アメリカン・ドリーム』とは、決して実現しない夢なのである。そしてさらに、実現しないとはいえ永遠に持ちつづける夢である」。

第三章「『パラダイス』&パラダイス」では、ノーベル賞作家トニ・モリスンの受賞後最初の作品『パラダイス』を読み解く。この作品にあるのは、「黒人という『黒い鏡』に映し出されるアメリカ」で、ここには「フレドリック・ジョンソンの『弁償法的反転』があるといい、著者

は黒人のもつ逆転の力を読み取る。また、キング牧師が一九六三年に行った演説(「私には夢がある」)から「アメリカ黒人」と南部についても言及する。「私には夢がある」は熱情と感動をもつて「アメリカの黒人」の夢と希望をかきたてた。一九六〇年代の公民権運動とブラック・パワーの盛り上がりとその証左である。

各章の後には「間奏曲」としてアフリカン・アメリカン・ドリームを追い求めた黒人女優アカデミー賞受賞のハッティ・マクダニエル、「黒いマリリン・モンロー」と形容されたドロシー・ダンドリッジ及び最初にブロードウェイに進出した黒人女性劇作家ロレイン・ハンズベリーのそれぞれの個性的なライフ・ヒストリーが語られており、読者を引きつける。

個々の原作文学作品の丁寧で緻密な読み込みと堅実な論述構成が黒人文学を語る本書に明晰さと奥行きを生み出している。同じ著者による『黒人のアメリカ』(ちくま新書、一九九七年)では、白人側がどのようにして「アメリカの黒人」を生み出していったのかを述べており、本書の背景を成すもので併せて読むと本書理解のパスpekタイプが広がり、深まる。

(川口健一)